

株式会社河村機械工業所

金属プレス加工業

生産管理システム刷新、グループウェア

所在地	本社営業所 ほか	東京都板橋区清水町2-4 埼玉県深谷市に工場
代表者	河村 護 インタビュー 回答者	取締役 経営管理部 部長 富田 幸浩 生産技術部 大井 陽介
会社URL	https://www.kawamura-kikai.co.jp/	
事業内容	金属プレス加工業	
創業	1951（昭和26）年	
資本金	6400万円	
従業員数	50名	



既存の工程管理システムには在庫管理機能がなく、新規業界・製品にも対応に難あり

Q システム導入前の課題を教えてください

当社では長年、自社開発の工程管理システム「k-Plus」を活用してきましたが、在庫管理の機能がないため、材料・仕掛品・完成品の在庫が適切に管理できていませんでした。また、k-PlusはMicrosoft Accessの旧バージョンに依存するため、サポート終了や開発者の退職により保守・改修も難しく、継続利用が困難に。加えて、主力の自動車部品以外の新規業界・製品への展開を進める中で、既存の仕組みでは業務に適合しないケースが発生していました。受注管理についても顧客からExcelで届く内示・確定情報を手入力しており、作業負荷や入力ミスが課題でした。また、社内のスケジュール管理や申請・承認が紙や口頭中心のため抜け漏れや非効率があり、社内LAN環境も遅く、デジタル活用の足かせになっていました。



受注管理の手入力が、直接データ取り込みで40分から数分に短縮

Q 導入後、前述の課題に対し、どのような効果がありましたか。

生産管理のパッケージシステム「アシスト」にk-Plusの強みである検査成績書作成やロット・トレース管理を引き継ぐ形でカスタマイズし、全面移行しました。これにより、工程実績やロット、使用材料を一画面で把握できるようになり、品質管理におけるトレース性が向上しました。また、受注管理についても内示・確定データをExcelから直接取り込み可能にし、手入力作業を削減。そのため、作業時間が1回あたり約40分から数分レベルに短縮でき、入力ミスも大幅に減少できました。加えて、現場端末ライセンスを増設したことで、工程開始・完了の登録がスムーズになり、LANの刷新によりシステムの動作速度や安定性も改善。現場での使いやすさが向上できています。社内情報共有についても、グループウェア導入により、スケジュールや設備（社用車、会議室）予約、文書（就業規則など）管理、議事録共有を一元化。電帳法対応の電子データ管理基盤を構築することもできました。

導入したシステムとその運用方法

生産管理システム「アシスト」
グループウェア「NI Collabo360」

導入したシステムに旧システムの機能を統合・拡張し、生産計画・生産指示の効率化、検査データのリンクなどを実現。情報入力用ライセンスも増やし、現場でのデータ入力待ちを削減。グループウェア導入によりデータ管理をルール化。

デジタル化の成果

生産管理・品質管理・情報共有を、「自社業態・業務に即した形」で再構築

作業時間削減、ミス防止、トレーサビリティ向上により、現場負荷とリスクを同時に低減

デジタル化を受身でなく、「現場と一緒に作り上げる改善活動」として進める文化を醸成

約半年もの現場ヒアリングで、日常業務への意見・要望を丁寧に吸い上げ

Q 導入時に、社内（特に現場や経営層）の理解を得るために工夫した点や、導入後に見られた社内の意識や文化の変化についてお聞かせください。

導入に際しては、製造部の課長や現場担当者へのヒアリングを半年近く実施し、日常業務に即した要望を丁寧に収集して進めました。納品時に顧客に提出する検査成績書などは、k-Plusと同じ入力感や画面構成とし、違和感の最小化に努めました。また、Excel取り込み機能など、「一度使えば便利さが分かる」機能を優先的に導入し、体験によって納得感が得られるように進めました。現場を利用者ではなく「共同設計者」のようにして巻き込んだことで、スムーズに定着できたと思います。グループウェアについても強制ではなく仕組みで定着させることを目指し、会議や朝礼でその画面を必ず確認する運用にし、各人がそこに情報を入れていないと困るという状況を作りました。こうして導入後には、これまで手作業でやっていた業務でも「本当に手でやる必要があるのか」など、当たり前を見直す意識が芽生えてきています。現場へのヒアリングも継続することで、現場から何かしらのシステムで解決できそうな提案の声が上がするなど、改善を継続的に考えていけるような土壌ができました。情報共有についても、その都度、聞きに行ったり紙を配ったりする慣習から、「システムを見れば分かる」文化へと徐々に移行できています。

Q 導入を終えて、「もっと検討すべきだった」と感じる点や、予期せぬトラブルなどありましたか。

そもそもプレス加工では、一般的な「部品→組立」型の生産管理思想がそのまま当てはまらず、材料を重量や長さで把握し、それを切断・プレスして数量化する業態のため、パッケージシステムでは対応が難しいのが問題でした。その材料重量・仕掛品の扱いは依然として難しく、在庫管理の完全最適化には追加のカスタマイズが必要です。また、過去データを参照するため、今もk-Plusを一部併用しており、完全移行には時間を要しています。情報共有についても、グループウェア導入でデジタル化が進んだことで、購買・申請フローの見える化不足など、新たな改善テーマが浮き彫りになりました。たとえば以前は、購買品の発注は各部門で行いましたが、現在は発注内容をグループウェアで経理に送り、経理側が発注しています。しかし、これだと申請内容は経理のデータベースでしか分からないので出張先などからは確認できません。そのため、別の方法も検討しています。



対象が幅広く使いやすい板橋区産業振興公社の補助金制度で、現場起点の「小さな改善」を継続

Q 御社の今後の展望と、それを実現するための次の一手（この先考えているデジタル施策など）についてお聞かせください。



今後は引き続き、材料・仕掛品の在庫管理精度をさらに高めるカスタマイズや、購買・進捗情報を横断的に共有できる仕組みづくりを進めていく予定です。それには大規模な刷新ではなく、現場の声を起点とした「小さな改善の積み重ね」を継続し、段階的にDXを進化させていく方針です。これらについては、タイミングを考慮して補助金制度と組み合わせることで積極的に推進していこうと考えています。その点で、板橋区産業振興公社（以下、公社）の補助金制度は非常に使い勝手が良いのです。一般的に補助金制度は、これから導入するものが対象ですが、公社の補助金では今回のように既存システムの刷新にも適用できました。また、デジタル化は経営に直結するものであり、できることは迅速に進めていきたいので、導入に向けて動き出している案件にも補助金を活用できるところも使いやすいです。このほか導入費用だけでなくサブスクリプションのアプリケーション利用料も一定の期間内で対象になります。こうしたデジタル化は、せっかく導入しても社員にうまく利用されるかどうかが不安なものですが、補助金があれば導入に踏み切りやすいですね。